



星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会 会報



年頭にあたつて

栗原邦俊



新年を迎えてもイスラエルの侵攻は留まらず、パレスチナ側の死者は25,000人を超えている。

2024年を迎えました。誰も、今年こそは災害もなく、争いごともなく、平和で平穏な年である事を願うものです。しかしながら、ロシア・ウクライナ戦争、イスラエルによる「ガザ」地区への戦争は一向に停戦・終戦の兆しは見えてきません。今年もこれらの戦争は、残念ながら継続されるでしょう。国際社会、国連の機能や力があまりにも弱いからです。それでも私たちは微力であっても戦争の終結を訴え、一日も早く平和が訪れることを粘り強く他の市民団体及び国際平和団体と連帯して運動をしていくことが必要です。先の米国のよるベトナムへの攻撃、「ベトナム戦争」はわが国だけでなく、世界の多くの人たちによる「反戦運動」もあって戦争の終結に至ったことを改めて想起すべきです。

次に昨年12月29日付朝日新聞の「耕論」で『公安警察暴

走の背景」が掲載されました。

この中でジャーナリストの青木理さん、元東京地検公安部長・元衆議院議員で弁護士の方若狭勝さん、映画「ヤジと民主主義劇場拡大版」の監督山崎裕待さんが、それぞれ述べています。

一つは、2020年3月、警視庁公安部が横浜市の機械メーカー「大川原化工機」が「兵器転用できる噴霧乾燥機」を中国に不正輸出したとして、同社長以下3人を外為法違反容疑で逮捕。その後、検察は公判直前の21年7月、突然公訴を取り下げ、刑事裁判を終結させました。同年9月、同社長らは、国に対して損害賠償を求める訴訟を起しました。その公判の中で公安側は、本事件は「捏造」であったことを証言。原告は勝訴することができました。

二つ目は、2019年7月の参院選で札幌での街頭演説中の安倍首相に「安倍辞ろ」「増税反対」のヤジを飛ばした市民2人を北海道警察が排除した事件。憲法に保障される表現の自由を侵害されたとして当該

「冤(えん)罪」の深層 ~警視庁公安部で何が~



大河原化工機冤罪事件について、NHKスペシャルで警視庁公安部の間を描き出した。写真は大河原化工機の社長。本文の「勝訴」について国と東京都は控訴している。

の2人は、北海道警に対して損害賠償訴訟を行いました。2人の訴訟は、札幌地裁ではいずれも訴えを認められ勝訴しました。しかし、控訴審判決では、片方の訴えは原告の主張を認めたにもかかわらず、片方は地裁の判決を棄却し、原告の敗訴となりました。同じ事件で、しかも同じ裁判所で違った判決が下されるといふ奇妙な結果となりました。私たち市民団体としては、二つ目の事件に注視していきたいと思っています。何故なら、公安は、常に市民や市民団体の動向を調査し状況等を把握しているからです。その証拠に元文部科学省事務次官の前川氏を辞めさせるため、読売新聞に前川氏のスキャンダルをリークし記事掲載させました。また、よく内閣改造時に就任にする新大臣の「身体検査」は大丈夫かとのことが言われますが、これは、公安が例え与党の者であっても、個人情報等を把握していることの証明であるといえるでしょう。

私たち市民及び市民団体は常に世の中の動向等を注視し、他の市民団体と協力していく行動が求められると思います。先の北朝鮮のミサイル発射に対する避難訓練に対する小川町や上里町の行動等を想起して下さい。先に述べた朝日新聞の耕論の中で若狭勝氏は情報生命線の公安は全国の警察網や協力者を駆使して各種団体を日常的に内定し、監視している」「公安の最大任務は、治

安への脅威とみなした団体の実態を解明し、時にはダメージを与えること」と言っています。私たち市民や市民団体は、憲法で保障された言論・表現の自由を維持・守るため、萎縮することなく整然と行動及び他団体と協力・協調していく必要があると思います。年頭に当たって私見を述べました。(熊谷空襲を忘れない会・賛同者)

この文章を書いている時、石川県の能登地方で大地震が発生したとのこと。被害が大きくならないことや被災者の安全を祈っています。

日韓の遠い「雪道」

大澤謙司



2015年、日本の安倍政権と韓国の朴槿恵(パク・クネ)政権によって「従軍慰安婦の日韓合意」がなされた。当時の日本の外相は、岸田文雄であった。合意内容の詳細は紙幅の関係で記せないが、特に強調されたのが、この合意は不可逆的・最終的なものということであった。要するに日本政府はこの問

題を終わりにしようという意図であった。

この合意について、政府はもちろん右派・保守層は当然歓迎し、残念ながら一部リベラル層にも同調する動きがあったことは記憶に新しいところである。しかし、日韓合意が強引で無理があることは当初から指摘されていたことである。問題は山ほどあるが最大のものは、多くの研究者が突いているように、「不可逆的・最終的」というところである。この言葉を真に言えるのは被害者だけだからである。加害の側が「不可逆的・最終的解決」等とは、どの犯罪でも決して言えることではないのである。

予想通り合意後も従軍慰安婦問題はなくなることはなかった。この映画「雪道」が制作され、様々な映画祭で受賞していることもその証である。この作品は、2人の異なる境遇の少女が、日本軍の慰安所で過酷な体験をして、そして生き延びる物語である。慰安所の内部を描写することは、大変センシティブな問題でもあるので、まぎりまぎりの表現と言っていると思う。ただ気になったのが日本の兵士の描き方で、少し型にはまらずきた点もあった。しかし、それらの点を補って余りあるのが主人公2人の演技力である。暗く重すぎる問題なので、観る方も肩に力が入り息切れしてしまいがちだが、2人の凛とした演技が最後まで観せる力となっている。ぜひ多くの人に鑑賞してほしいと思う。

SNSの中や一部の政治家・評論家の中には目も当てられないような韓国・朝鮮の方に対する差別表現が飛びかっている。「いつまであやまり続けるのだ」という声も多い。その言葉に対してはいつも「相手が納得するまでは、いつまでもあやまり続ける」と答えている。日本と韓国・朝鮮との間には凍りかけた雪道がある。しかし、誠実に真摯に、そして粘り強く向き合えばいつか春が来るものと信じている。

なぜ、志賀原発を廃炉にできない！

吉田庄一



2024年1月1日午後4時10分、能登半島珠洲市を震源とするマグニチュード7.6の地震が発生した。輪島市と志賀町では震度7を記録。私たちは想像を絶するような被害を、日々更新される地震報道で目の当たりにしている。被災してまもなく発せられた珠洲市長の「9割が全壊か半壊」という悲痛な叫びが被害の状況を物語っていた。それに対して、国や石川県の初動は失敗したと言わざるを得ない。繰り返され

る自然災害に対する避難所などの状況もあまりにもお粗末だ。

私は年末から年始にかけて青木美希さんの「なぜ日本は原発を止められないのか？」(文春新書)を読んでいた。フクイチの過酷事故後、関連書物をたくさん読んだが、久しぶりの原発本だった。汚染水を処理水と言い換え、またぞろ安全神話が流布されているタイミングに出版された本書は、政・官・業・学そしてマスコミの大罪を鋭く告発している。フクイチの過酷事故後でも言われたことなのだが13年経っても全く変わっていないのだ。

今回、能登半島先端の珠洲市に計画された原発を、地元住民の反対運動で撤退させたことを知ったが、大げさでなく彼らは日本を救ったのではないかと思う。建設予定地だった場所

は、地震で1m隆起しているという(恐ろしいことだ)。震度7を記録した志賀町には北陸電力の志賀原発がある。フクイチの過酷事故後停止していたのは不幸中の幸いであった。なぜ停止していたのか、原発の下に活断層があると指摘されると指摘されてきたからである。活断層があると原発は造れないし当然運転できない。しかし停止中の原発を一刻も早く



子力村の面々は去年、断層は活断層でない」と結論づけたのだ。これを受けて経団連の戸倉会長は、11月28日に志賀原発を視察して「早期再稼働を期待したい」と述べていた。

地震発生直後、テレビ各局は「志賀原発は異常なし」とする発表を速報で流した。しかしその後様々なトラブルが報告された。何を根拠に問題なしだったのか。細かなところは省くが、モニタリングポストはほとんど機能しなかったし、最大加速度は2826ガルを記録している。建屋はこの値に対応していない。信じられないような海岸の隆起、地割れ、沈降そして津波、何より、もしもの時の避難ルートが確保できない現実を見るだけで、ここは原発の立地として最悪な場所であることが明らかだ。

では、能登半島だけが特別なのか？冷静に考えれば誰にもわかることだが、日本列島はどこでも巨大地震が起きる可能性がある。ということは、停止中の原発を含めて、54基すべてに過酷事故が起る可能性があるのだ。特に福井県若狭湾に点在する14基は、過酷事故が起ると関西圏、中部圏、関東圏までも避難を強いられる可能性がある。原子力村の面々は、国が減ぶことも厭わないということなのだろう。

能登半島地震を見るだけで、原発を推進することの犯罪性は明らかだ。原発を止めると雇用が失われるという意見がある。しかし再生可能エネルギー

への転換で、はるかに多くの雇用は生み出される。電気が足りなくなるという意見もある。志賀原発が止まっていたにも関わらず電気が一番早く復旧しているではないか。マスコミを含めて原子力村の利権構造が危険極まりない原発を続けようとしている。未来に責任を持たない無責任な行為と言えよう。まずは志賀原発から廃炉にしよう。

栗原俊雄さん講演会のご案内

日時 2024年3月31日(日) 14時
場所 熊谷市市民支援活動センター

当会では、熊谷空襲を語り継ぎ平和について考える講演会を毎年行っています。今春は、日本の近現代史特に戦争に関する著作が多い、毎日新聞記者の栗原俊雄さんを迎えて開催します。
演題「東京大空襲の戦後史」～民間人戦争被害者を切り捨てるこの国の「戦後」とは何か～
ふるっての参加をお待ちしています。(定員 35名)

会計報告 (2023/12/14~2/5)

収入: 6,700 円
支出: 10,785 円
残高: 56,445 円

編集委員 吉田庄一、小川美穂子、米田主美
連絡先 吉田庄一 (090-4957-9181)
メール imajin241@gmail.com
HP <http://www.peace-kumagaya.org>